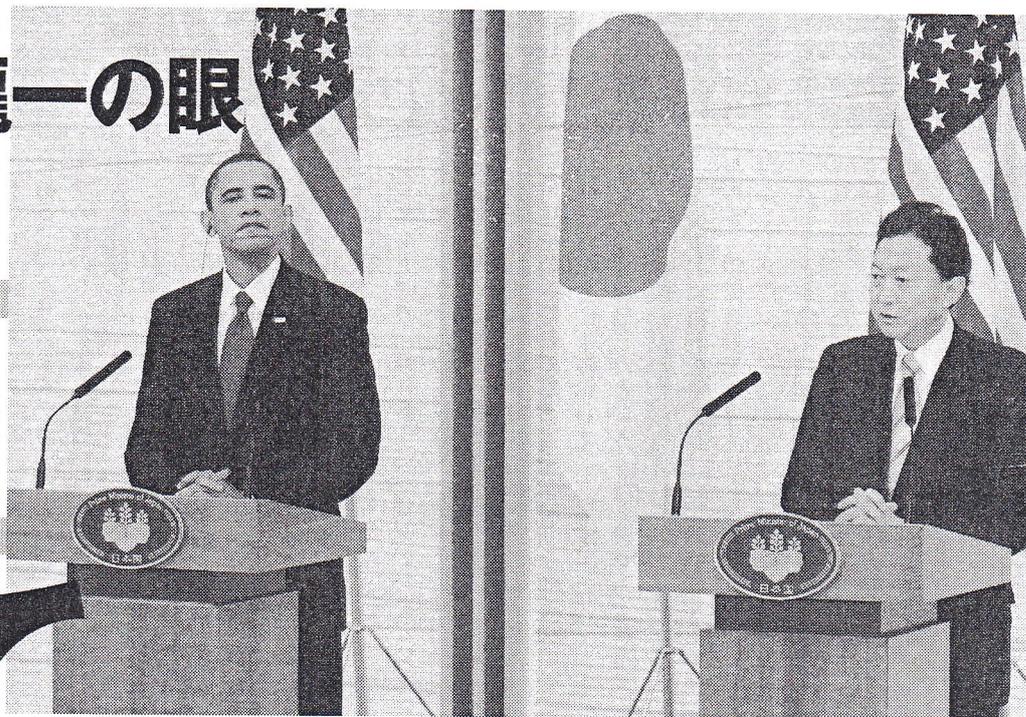


ジャーナリスト 手嶋龍一の眼

表面上は極めて友好的に見えても、一皮めくればそこには冷徹なホンネがある。ユキオ・バラク関係、は極めて脆い



いて

オバマからのシグナル

アメリカのオバマ政権は、鳩山民主党が圧勝したことで基地問題で譲歩しかけていた。普天間基地の移転を進めるためには従来の合意を実質的に手直しすることもやむなしという判断に傾いていた。地元沖縄の要望を容れて、代替施設として辺野古地区に建設する予定の滑走路を沖合に50mほど移動させてもいいと、初めて日本側に伝えてきたのだった。

だが鳩山政権はワシントンからの重要なシグナルを適確に見きわめることができなかった。それどころか、岡田外相は、米軍が部隊の運用上から受け入れられないとしている嘉手納基地への統合案に拘り続け、決着点を見いだせないままオバマ大統領を日本に迎える異例の事態となった。

結局、米軍基地の再編問題は、日米の作業グループの検討に委ねられ、これに先駆けて岡田外相は沖縄を

訪れた。だが嘉手納基地への統合に反対する地元沖縄と米軍双方の冷ややかな視線に迎えられた。「マニフエスト」に華々しい主張を書き込むことはやさしいが、地元を説得し、同盟の相手と妥協策を探ることがどれほど難しいかを思い知ったことだろう。

オバマ大統領が東京で行った「東アジア演説」は、太平洋を挟んだ同盟がガラス細工を思わせるような脆い土台の上に立っていることを窺わせた。

「私たちは日米同盟を再確認しただけでなく、さらに

深めていくことで合意した。沖縄駐留米軍の再編について両国政府が達成した合意を実施するため、作業グループを通じて迅速に進めていくつもりだ」

オバマ大統領は、新たに設置した作業グループとは「両国政府が達成した合意」を着実に実施していくためのものだと釘を刺した。私も招かれて、このオバマ・スピーチを聞いたが、日米が同盟を深化させたいなら、懸案を解決する意思を示すべきだというトーンに貫かれていた。

壇上のオバマ大統領は、私が知っている、あの颯爽とした青年政治家とは微妙に異なっていた。47歳の若

鳩山首相は妙に自信満々だ。普天間基地問題で米側が苛立っていることなど作り話と言わんばかり。だが、根拠のない自信ほど危険なものはない。情報のエキスパートの眼に鳩山外交はどう映っているのか。

鳩山外交 そのあまりの 無邪気さにつ

さでホワイトハウス入りした大統領も、やや老けこんでしまったのだろうか。

白い歯を輝かせて拍手に
応える姿は依然として爽やか
だった。短く刈り込ま
れた頭髪には白いものが交
じっていた。無名時代から
この人を見続けてきた者には、
老成というのではない、
ほの暗い影がその顔に落ち
ているように思われた。

リーマン・ショックの痛
手からアメリカ経済はいま
だ回復しておらず、政権の
命運を賭けた健康保険の改
革の行方も予断を許さな
い。さらには混迷の度を深
めるアフガニスタンへ軍の
増派も迫られている。

だが、この大統領の表情
をよぎる険しさは、眼前の
政治情勢の厳しさだけでは
説明できない。肌の黒い者
に神聖な大統領職を委ねる
わけにはいかない。米
政界の極右に巣くっている
意思が黒々と影を落として
いる。演説会場の厳重な警
備態勢は、このアフリカ系
の指導者をとりまく環境の
苛烈さを物語っていた。

にもかかわらず、ときお
り微笑みすら湛えて語られ
る大統領のスピーチ。そこ
にちりばめられたエピソードは、演説の主要テーマに
聞く者を自然に誘って、
人々を魅了した。

インドネシア人の男性と
再婚した母に連れられて、
新しいアジア人の父のもと
に赴くバラク少年。彼は途
中で立ち寄った日本で、鎌
倉の休日を楽しんだ。大仏
様の前でほおばった抹茶ア
イスクリームの美味しさを

鳩山・プランには冷淡

アメリカの中枢部が襲わ
れた9・11同時多発テロ事
件は、超大国の進路を大き
く捻じ曲げてしまった。ア
メリカを狙う国際テロリス
ムの脅威があれば、これを
座視しない。伝家の宝刀を
抜いて脅威を取り除く

。こうしたブッシュ・
ドクトリンを掲げて、アメ
リカはアフガン戦争からイ
ラク戦争へと突き進んでい
った。ブッシュ大統領は、
イラク、イラン、北朝鮮の

追憶し、異国の小さな旅人
に示された日本人のやさし
さに触れて、日米の絆の大
切さを強調したのだった。

オバマ大統領は、少年の
日の思い出に託して、「オ
バマのアメリカ」が東アジ
アに再び帰って来たと言
った。これは一種の「アジア
回帰」演説と呼ぶべきもの
だと思ふ。

なぜ「オバマのアメリカ」
が東アジアに帰ってこなけ
ればならなかったか、若干
の解説が必要かもしれない。

3国を「悪の枢軸」と呼ん
で対決姿勢を露にした。

その果てに、ブッシュの
アメリカは、持てるすべて
の力を注いで、サダム・フ
セインのイラクに軍事侵攻
していった。その結果、も
う一つの戦略正面である東
アジアに巨大な力の空白を
生じさせてしまった。アメ
リカの外交・安全保障面
でのプレゼンスは急速に低下
していった。

超大国アメリカといえど

も、対イラク戦争と対北朝鮮戦争を同時に行うことは断念せざるを得ない。こうした「ブッシュの戦争」の最大の受益者こそ北朝鮮の金正日政権だった。アメリカは、北朝鮮を力で抑え込むことを断念しただけではない。対東アジア外交の主導権を冷戦後初めて中国に委ねて議長国とし、6カ国協議を通じて北朝鮮の核問題を解決しようとした。

金正日の北朝鮮は、これによってアメリカが武力で北朝鮮の体制を転覆する可能性はなくなると判断し、安んじて核とミサイルの開発に突き進んでいったのである。

ハワイに生まれ、インドネシアで少年時代を過ごしたオバマ氏は、イラク戦争のゆえに、アメリカが永く東アジアを留守にしてしまったことの誤りを皮膚感覚で理解できるのだろう。「私は相互利益と相互尊重に基づくアメリカのリーダーシップを取り戻し、新たな取り組みを模索してきました。アジア太平洋での私

達の努力は、米国と日本の永続的かつ再活性化された同盟関係に大いに根ざしたものであるでしょう」

演説の中のこの一節は、「オバマのアメリカ」が東アジアに再び回帰し、イラク戦争で生じた戦略上の空白を埋めようという決意の表れと受け止めていい。

オバマ大統領のこうした姿勢は、表面上は鳩山首相が提唱する「東アジア共同体」構想と相通じているように見える。だがオバマ演説が「東アジア共同体」構

中国の影

その一方で、東アジアの大国・中国は、この構想に距離を置いたまま容易に本音を覗かせない。9月の国連総会を機に、鳩山首相は、中国の胡錦濤国家主席に「東アジア共同体」構想を示して理解をもとめたのだが、ニコリともしなかったという。

胡錦濤主席とすれば「中華共同体」ならともかく、これが「日の丸共同体」に

想に共鳴している様子は窺われぬ。鳩山政権が新たな国家目標として掲げる「東アジア共同体」を事前にアメリカ側に示して周到に協議した跡も窺えない。政権交代前夜の8月27日に、鳩山首相は「ニューヨーク・タイムズ」の電子版へ寄稿し、唐突に新たな構想を打ち上げたのだった。ワシントンの戦略家たちの中には「こうした構想は太平洋に線を引き、日米を分断するものだ」という警戒感が根強い。

近いものなら、賛成しかねると言いたかったのだらう。この段階で中国の情報分析チームは、鳩山総理の「東アジア共同体」構想にアメリカのオバマ政権側が違和感を持つていることをつかんでいた。「中国のインテリジェンス能力恐るべし」と言うべきだろう。中国は、この構想が日米同盟に遠心力となって作用することを読み抜き、場合

によっては日米間に楔を打ち込む外交上の武器となると読んでいるに違いない。「相互に結び付きたいまの世界では、力はゼロ・サム・ゲームである必要はなく、他国の成功を恐れる必要はありません」

成功しつつある国とは中国を指す。オバマ大統領は、やがて世界第二の経済大国となる中国の台頭を恐れる必要はない、と日本に論じている。

「米国は中国を封じ込めることを求めてはいない。中国とのより深い関係は日米二国間同盟の弱体化を意味するものではありません。逆に、強力で繁栄する中国の台頭は、国々の共同体の力の源泉となりえます」

日本、中国、アメリカをいわば正三角形のような形に保って、東アジアの安定に役立てていきたい。オバマ演説には、こうしたアメリカの戦略的な意図がくつきりと投影されている。

鳩山首相は、政権奪取後から一貫して「緊密で対等な日米関係」を主張してき

た。しかし、圧倒的軍事力を誇るアメリカと、軽武装・経済重視大国を目指す日本の同盟は、一種の非対称な関係なのである。

そんな関係が対等なものとなるには、アメリカが東アジアの有事に責任を持ち、一方の日本はアメリカに軍事基地を提供することでバランスしなければならぬ。それゆえ、日本はこれまで、主権の一部を制限し、沖縄の人々の犠牲の下で、基地をアメリカに提供してきた。加えて思いやり予算をはじめ膨大な財政負担に耐えてきたのだった。

だが鳩山政権は、前政権の約束には拘束されないとして、普天間基地の移転計画を見直すと主張している。ロシアのエリツィン政権は、一種の革命で出現した政権だが、前政権が結んだ国際約束は引き継ぐと宣言し、国際社会に迎え入れられた。民主的な選挙で誕生した鳩山政権が国際約束に縛られるのはいまもあるまい。

対等で緊密な日米関係を

鳩山外交 そのあまりの 無邪気さについて

これに対してアメリカ側、とりわけペンタゴンは、V字滑走路は1cmたりとも動かさないと頑なな態度をとり続けてきた。自民党時代は、国防総省の強硬な姿勢をついに覆すことはできなかった。だが基地再編の見直しを掲げる民主党政権の大勝は、さしもの国防総省をも動かし、「50mほどなら沖合に動かしてもいい」と態度を軟化させたのだった。

しかし、針の穴を通すような難しい交渉の外にいたこともあって、民主党は政権の座についた後も、国外や県外への移転があたかも可能であるかのような姿勢に終始してきた。そしてオバマ訪日が迫っても、岡田外相は嘉手納基地への統合に拘り続け、日米の溝を広げてしまう。

岡田外相は「嘉手納基地統合案を含めて、私自身が納得するまでしつかりと検証したい。交渉プロセスにかつてのことも含めてきちんと把握しているのは仲井眞(沖縄県)知事をはじめ、日米のごく一部の限られた人たちだ。われわれはそれを知らないので再検証しているのだ」と述べている。首相も外相も揃って「再検証」発言を繰り返しているのだが、野党時代の民主党も国政調査権を持ち、外務委員会の主要メンバーでもあったはずだ。現地調査もすれば実施している。交渉の内容を知らないという主張は通るまい。

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党



沖縄を訪れた岡田外相。「現実」は見えただろうか

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党

首相も外相も力量不足

沖縄県と名護市は自民党政権時代、普天間飛行場を向こう3年をめどに閉鎖状態とし、辺野古に建設予定のV字滑走路を計画よりも沖合100mほど移動してほしいと政府に要望した。そうすれば辺野古への移転を認めてもいいと妥協案を示していた。

合意を前提としない」と繰り返し発言している。これでは、日米同盟重視が口先だけのことだと受け止められても仕方がない。

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党

野での政治主導というものが、外務官僚から貴重なインテリジェンスを吸い上げることができないなら、それは自らの力量不足を告白しているようなものだろう。基地問題をめぐる民主党